

本の招待席[吉富昇著『It's Handy! 今すぐ使える100フレーズ』 新谷弘美著『病気にならない生き方』 福田みどり著『司馬さんは夢の中』 ほか]

YAMAMOTO, Choichi / 山本, 長一

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

7

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

2007-02-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002899>

本の招待席

人は、何を読んで育ったかと、よく聞かれるものだ。決して豊かとは言えない私の読書歴では、ちゅうちょなくこう言える。小学生の頃夢中になった少年雑誌『譚海』と、貸本屋から借りた宮本武蔵などの講談本が一番だと。読書ではないが、当時の映画も大人の使う古いことばを教えてくれるもう一つの読書であって、以上の三つが、戦後まもなくの経済上貧しい時代にあって、津軽の片田舎の小学生には中央の文化にアクセスするための学校であった。

寺山修司流に言えば、何しろ、中将湯や仁丹、フルヤウィンターキャラメル、乃木学生服の看板ぐらいしかない最果てのしょうゆう小邑で思春期を送った少年には、心をときめかせてくれるものといっても、どさ回りの旅役者や市川少女歌舞伎の興行ぐらいであった。

「カバヤ文庫」は、挿絵にしろ文章にしろ幼稚すぎる名作シリーズで、私は食指が動かなかった。雑誌「少年」、[少年倶楽部]、[冒険王]、「おもしろブック」などもこの手で、ガキの読むものと軽んじていた。「太陽少年」[文庫]、「探偵少年」(だったか)は、刊行開始後数年で消えてしまったが、まあまあ水準だった。他に少女雑誌や「野球少年」[漫画少年]などがあった。一冊100円程度の雑誌を買える子は、クラスでせいぜい2、3名くらいだったほど貧しい時代に、よくもあんなに沢山の少年少女雑誌が店頭を賑わしていたものだと、今にして驚きである。少年少女名作全集の類はどれも文章が気に入らず、江戸川乱歩の怪人二十面相や少年探偵団や明智小五郎にうつつを抜かし、時代物を当時載せていた横溝正史の他にも島田一男、海野十三、高垣眸などの読切や連載小説に耽溺することで、片田舎の救いようのない現実社会を直視しようとしなくせがついてしまった。それにしても「人間豹」を『譚海』で読んだ体験は鮮烈だった。挿絵もエロチックで、大人の雑誌と大差なかった。つい最近光文社文庫で江戸川乱歩全集30巻が出版されたので、改めて読み出すと、子どもの頃に読んだのは、ポプラ社刊のも入れてせいぜい10巻程度だったと分かった。「孤島の鬼」など今読んでも実に面白い。若い学生諸君に読ん

でもらったところ、文章がきれいで病みつきになりそうとのことであった。乱歩は当時の最高のインテリで欧米の小説を読みこなし、精神医学などにも通じていて、その点漱石と共通している。寺山修司も愛読していたそうである。

私は長じて英米仏露の文学をかじるようになったのと、高校生の頃隣町出身の太幸治にはまり、級友からの影響で漱石に魅かれてしまったので自然に乱歩は卒業となった。

さて、最近読んだ本の中から、お勧めの読み応え本を10冊だけ取り上げてみよう。

『It's Handy!』 今すぐ使える100フレーズ』

吉富 昇 著

(2003年10月 南雲堂)

——短かく、気のきいた、しかもすぐ役に立つ英語のフレーズが100きっかり収められている。新書サイズで、ワンフレーズ勉強するのに30秒もかからない。

『病気にならない生き方』

新谷 弘美 著

(2005年10月 サンマーク出版)

——100万部近い大ベストセラーである。私の信頼する秋山龍三氏が伊豆松崎山中で「ふるさと村」を開設し、自給自足、完全無農薬、有機栽培の理想的な農的生活を實踐されている。彼の提唱している暮らし方が、特に食生活において、この本の主張と全く一致している。医食同源、身土不二の立場から、できるだけ多くの学生諸君に読んでもらいたい目からウロコが落ちる話題本である。

『司馬さんは夢の中』2

福田みどり 著

(2006年1月 中央公論新社)

—— 何てすてきな夫婦なんだろうと、司馬遼太郎夫妻のけれん味のない暮らしについてのみどり夫人の語るような文体に滲み出ている彼女のキャラクターに魅せられた。二人が産経新聞大阪本社で同僚だったと知り、私は昨年4月に大阪へ行き、旧社屋だったあたりをぶらぶら歩いてみた。「嶋中事件」、「野沢の緑ちゃん」の章はとても興味深い。それにしてもみどり夫人は東京弁なのである。大阪弁かと思っていたのに。

『私のパリ 私のフランス』

岸 恵子 著

(2005年12月 講談社)

—— 私の一番好きな女優は岸恵子である。この本は彼女のフォト・エッセイ集で、読んで見ても楽しく、おしゃれだ。彼女ほど写真うつりのいい女優も珍しい。「にんじんクラブ」の一員として知的で美しい彼女に胸がときめく。「君の名は」の真知子、「雪国」の駒子、最近のNHK連ドラなどの演技、どれもやや素人っぽく、あでやかで、口が大きいのがバタくさくていい。「ベラルーシの林檎」などエッセイストとしても実績がある。文体は割合古く、どことなく品があるのは、川端康成やジャン・コクトーにも可愛がられたせいかな。この本の写真の彼女は本当に美しく、パリでもきっと目立つことだろう。テレビ番組でも見たが、彼女と俳優の岡本健一が行ったブルターニュ地方をいつか訪ねてみようと思う。ピレネーが見晴らせる私の大好きな町ポーが出て来ないのはさびしいが。

『土 恋』

津村 節子 著

(2005年10月 筑摩書房)

—— 私の研究対象はアイリス・マードックという小説家である。英国のすぐれた小説家には露仏と違って女性が多いせいかな、ジェイン・オースティンはじめ女性の作家のを読む傾向が強いのは否めない。若い頃は、倉橋由美子や原田康子、ブロンテ姉妹などを読み、今は高樹のぶ子がまあ気に入っている。私は東欧のルーマニアに関心があるので、高樹の朝日の連載小説「百年の預言」をひどく興味深く読んだ。今回書店で目にとまったのは『土恋』という小説で題名からしていい。津村節子は陶芸や和紙や染織など日本の伝統工芸に詳しく、この小説も越後保田焼きの北野窯窯元に嫁ぐ「みほ」の越後女としての生き方を平明たくまざる筆致で描いた最新作であり、現代の「北越雪譜」とも言えよう。私は齢を加えるにつれて、スペアリブよりも白身魚を好むようになり、小沼丹や津村のようなリパーゼを沢山分泌しなくていい文章を好ましく思っている。女性主人公みほの姿が目の前に浮かぶような気がするのも、作者としての誠実な態度が現地の安田町はじめ全国の窯元を訪ねての取材からと分かり、ローカルカラー豊かな臨場感に心地よく酔うことができた。

『海辺のカフカ』上・下

村上 春樹 著

(2005年3月 新潮文庫)

—— 私は東京中野生まれで、戦後も30年余り区民だったので、田村カフカ少年とナカタさんが中野区民であることに親近感を覚えた。そして、この二人がパラレルなストーリー展開の中でいったいどこで交わることになるのかと、興味をもってこの長編を読み進めたが、ついに直接の出会いがないまま終る。

— 読して〈愛と暴力〉のテーマが読みとれる

が、そこは春樹ワールドである。彼の才気煥発を反映している一種の「教養小説」としての体裁をなしているのも、若い読者に好感をもたれるゆえんか。

脇役として重要な甲村図書館の大島さんの「世界の万物はメタファーだ」というセリフは、この小説自体が一つのメタファーであることのメタファーなのか。寺山修司が「誰か故郷を想はざる」で「去りゆく一切は比喩にすぎない」（ゲーテの『ファウスト』中の引用）と言っているのを私は連想する。寺山とのアナロジーは、寺山の『家出のすすめ』が、カフカ少年の15歳にしての家出と父殺しを誘発している点に見てとれる。早稲田の同窓として村上は寺山を意識しているのかもしれない。

主人公カフカのドッペルゲンガーとしての「カラスと呼ばれる少年」の存在は大きく、この分身がカフカに命令し、予言するのである。これはオウム真理教などの社会現象のメタファーの意義以外に、作劇上余り意味のない偏重ではないのかと私には疑問である。カラスはこの小説に興行を決して与えているようには思えないからだ。

カフカ少年の分身やパラレルなストーリー、神話的引喩、記憶など春樹ワールドのミスティシズムは、例えば高村薫の『晴子情歌』（新潮社、上・下）の主人公のひとり福澤彰之の脳の前頭葉からの記憶や指令の多用に似ているので、いわゆる〈ミラー細胞〉のなせる技であるという指摘もありえよう。

この作品の読者に人気があるスーパーナチュラルな力をもつナカタさんは言うまでもなく、星野青年も私には魅力である。キャラクターづくり（人物設定）の上で、他にさくら、大島さん、佐伯さんなど〈癒し〉を与えてくれる役割は特に重要である。村上は、サリンやアフガン・イラク戦争、パレスチナ問題、9・11同時多発テロ、首相の靖国公式参拝などによる戦争の風化などの世相に、四国山中に不思議なコミュニケーションをつくり、俗界と断絶した世界に隠栖する第二次大戦の敗残兵などを配し、記憶の腐蝕をきちんと喚起する点に村上の生まじめさが感じられる。

私は読み終えて、高松の甲村図書館の大島さんに会ったり、また高松市内の喫茶店でベートーベンの「大公トリオ」を聴いてみたくなった。ナカタさんは猫とも石とも会話することができ、蛭やアジ、イワシの大群を空から降らせる超能力をもっているのもユニークで、私は中野駅近くでナカタさんやカフカのような少年に会えるのではと期待しながら今も徘徊している。『オディプス王』を原テキストにしているこの小説には高松がデルポイにあたるのだろうか。

カフカは、佐伯さんからもらった絵を眺め、風の音を聞きながら、15歳にして一朝目覚めれば自分は「新しい世界の一部になっている」と、カラスと呼ばれる少年によって予言される。こういったエピローグからも、『海辺のカフカ』は少年の成長を約束する新しい教養小説の体をなしていると言えよう。

『さまざまな愛のかたち』

田宮 虎彦 著

(2006年2月 みすず書房)

——題名のごとく世界文学の名作十一編中に現われた男女の様々な愛を読み解いていく著者に共感することしきりであった。成人していくにともない誰しも肉と魂の葛藤に悩まされる以上、恋愛はいつまでも小説に取り上げられるであろう。こういったテーマについての著作の中では、田宮虎彦と前田愛のがそれぞれ白眉であろう。私は津軽での高校時代、友人たちの演劇部が上演した虎彦の『落城』が忘れられない。

私は、人を愛すれば愛するほど孤独になるのではと、死と同じように愛は常に破局へのベクトルを志向するという脅迫観念に昔からとりつかれてきた。虎彦の『愛のかたち』は、愛と孤独との弁証法である。

取り上げられた作品中、高校生の頃最も涙をしばったモームの『人間の絆』を例にとると、その頃の自分が虎彦によって甦ってくる。私はあばずれ女のミルドレッドに知的なフィリップがどうして溺れて破滅していくのかと、不可解

に思いながら恋には苦悩しかないのだと、あの時絶望にとらわれていたことが懐かしく思い出される。

『旅行記作家

マーク・トウェイン』

飯塚 英一 著

(2006年1月 彩流社)

——明治大のマーク・ピーターセンは、トウェインとシェイクスピアは傑出した知性を有していると言っているが、私はその上さらにバルザックとトウェインはアドレナリン分泌量の多い作家の双璧だと思っている。トウェインの旅行記作家としての面は様々な生活上の必要に迫られてのことであり、意外なことにその実像が知られていないという点に着目した著者の畑眼に敬意を表したい。

トウェイン研究家の著者は実に丹念に資料と作品にあたり、今までの研究者たちが看過してきたトウェインの波瀾万丈の生涯は最後のページまでわくわくさせてくれる。トウェインの実像を映画化すべきである。

『「秘めごと」礼賛』

坂崎 重盛 著

(2006年1月 文春新書)

——著者は残念ながら太宰の『斜陽』の女性主人公かず子の、作家上原との「秘めごと」について語っていない。これこそ「道徳革命」への戦後女性の導火線であるからこそ、語ってほしかったが、私の愛読する乱歩、つげ義春、川崎長太郎、谷崎、荷風など取り上げているからまあ許せる。

「秘めごと」は単に性交の回数や、渡辺淳一の『失樂園』における「死体検案書」の類ではない。現実の性に追い付けないフィクションの性という宿命を前にして、私はただうたた然として立ちつくすだけである。著者の「人は『秘めご

と』によって鍛えられる」に安堵にならない安堵を覚えるのも哀しいものである。

『「心」と戦争』

高橋 哲哉 著

(2003年4月 晶文社)

——「共謀罪」の成立を目指そうとしたり、一連の憲法改悪、教育基本法改悪への動き、靖国への公式参拝、東京都に特に顕著な日の丸、君が代問題などナショナリズムの復古調が今の日本の主流を占めつつある。戦後の貧しくとも自由の中の秩序で育ってきた私には、こういったトレンドは息苦しく感じられる。

前首相の靖国参拝は「心の問題」と言い切る姿勢は、ひるがえって国民ひとりひとりにも言える権利ではないか。その個人から「心の問題」の自由を奪わない国が真の民主国家ではないのかと私は常日頃思っていたので、その理論的根拠を鮮やかに切って見せた著者の勇氣に敬服する。

最近の浮遊する大学の中で、私自身が前首相のように公人と個人の使い分けを真摯なる学生に批判されていることから、この本を読む価値が大と思った。いじめも、人殺しも、電車内の化粧も、箸を使えないのも戦後の日教組に責任転嫁する私の周囲の無責任な人たちがマジョリティーになりつつあるのが嘆かわしく、せめて乱歩の時代に先祖返りし、国家や市民の「品格」とは何かをじっくり考えてみようと思う。また「爆笑問題」の太田光のようなお笑いの逸材が『憲法九条を世界遺産に』（集英社新書）と言っていることに、新しい時代のたくましい青年の良心を感じ、意を強くしている。

おせっかいかもかもしれないが、多少時間のある在学中に、幅広く様々な本を学生諸君に読んでもらいたいと願っている。でも、これもあくまで「心の問題」であるのに変わりはないのだが。

(人間環境学部教授 山本 長一)